

現在地のまなざし日本の新進作家 vol. 21

The Gaze of the Present: Contemporary Japanese Photography vol. 21

2024年10月17日 [木] - 2025年1月19日 [日] 3階展示室

大田黒衣美 | Otaguro Emi

かんのさゆり | Kanno Sayuri

千賀健史 | Chiga Kenji

金川晋吾 | Kanagawa Shingo

原田裕規 | Harada Yuki



〈New Standard Landscape〉より 2022年 作家蔵 ©Sayuri Kanno

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するために、新しい創造活動の展開の場として「日本の新進作家」展を2002年より継続して開催しています。

21回目となる本展では、写真の傾向をひとつにまとめることや定義づけることを目的とはせず、それぞれに異なる作家たちの表現を通し、多様で捉えどころのない写真の現在地を紹介します。表現手段として、あるいは作品の核となるテーマとして、異なる視点と多様な手法で写真をあつかい、社会、環境、人と人との関係性を自身の立ち位置から問い直す5名の作家—大田黒衣美、かんのさゆり、千賀健史、金川晋吾、原田裕規—の作品が一堂に会します。

刻々と変化する世界、そして写真を取りまく新しい環境のなか、それぞれの手法と視点を持って写真というメディアを選び取った5名の作家の試みは、写真の可能性を多義性のなかにひらくとともに、現在を生きる私たちにとってとはすこし異なる角度から世界を見る視点を与えてくれるでしょう。

出品作家と作品

大田黒衣美 | Otaguro Emi

「時間を留める」という写真のもつ根本的な性質に着目して写真を制作。生きている猫をキャンパスに、体温によって形状が変化するチューインガム、ティッシュ、ウズラの卵の殻などを使って生物や環境と自分との関係性を、絵画も手がける作家ならではの軽やかさで、画として凍結させます。本展では日常的な素材を絵画的に組み合わせる代表作《sun bath》の新作を、インスタレーション展示します。



《sun bath》2023年 作家蔵 ©Emi Otaguro

福岡県生まれ。東京造形大学美術学科絵画科専攻卒業、東京藝術大学大学院修士課程油画科修了。2019年に文化庁新進芸術家海外研修制度を受けベルリンを拠点に活動。絵画、写真、映像、インスタレーションなど、さまざまな手法を用いて生み出される独自の風景は、鑑賞者のあいまいな感覚を刺激する。主な展覧会に「アーティスト@TAD 大田黒衣美『Boiled Aqua』 富山県美術館 1階 TAD ギャラリー（富山、2024年）、「ねこのほそ道」豊田市美術館（愛知、2023年）、「食と現代美術 Part9—食とアートと人と街—」BankART1929（神奈川、2023年）、「DOMANI・明日展 2021」国立新美術館（東京、2021年）など。

かんのさゆり | Kanno Sayuri

20年以上徹底して風景を撮り続けているかんの。本展では、2011年東日本大震災以降に、かつての風景に代わり新たに表れる郊外の新築住宅などの風景を、継続して撮影する〈New Standard Landscape〉シリーズを、新作を交えて高密度に展開します。自身が暮らす土地の仮想的風景を淡々と観察し、記録した画面には現代の社会背景ともつながる匿名性が漂います。



〈New Standard Landscape〉より 2022年 作家蔵
©Sayuri Kanno

宮城県生まれ。東北芸術工科大学情報デザイン学科映像コース(現 映像学科)卒業。2000年代初頭の大学在学中からデジタルカメラを使用した作品制作を行い、近作では自身の暮らす土地の暫定的で仮想的な風景の撮影を続けている。主な展覧会に「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2022 The Everyday-魚が水について学ぶ方法-」(東京、2022年)、「2020年若手アーティスト支援プログラム Voyage 風景の練習 Practing Landscape」塩竈市杉村惇美術館(宮城、2021年)、「写真の使用法 新たな批評性へ向けて」東京工芸大学 中野キャンパス 3号館ギャラリー(東京、2015年)など。

千賀健史 | Chiga Kenji

ドキュメンタリーの視点をもとに、身近にある社会問題をその社会構造からあぶりだす千賀。本展では、2019年からリサーチを続ける特殊詐欺をテーマにしたインスタレーションを展示。ファッションカメラマンのアシスタント経験もある千賀の洗練された画面には、作家の綿密な調査によって作り出された虚像と現実が多層に織り込まれ、人間の思考や衝動があぶりだされています。



〈HIJACK GENI〉より 2021年 作家蔵 ©Kenji Chiga

1982年滋賀県生まれ。2008年大阪大学基礎工学部卒業。緻密で長期間に渡るリサーチを経て、ドキュメンタリーの視点と虚実を混ぜたイメージを作り出し、現実の社会問題をあぶりだす。主な展覧会に「千賀健史展『まず、自分でやってみる。』」BUG（東京、2024年）、「プリピクテジャパンアワード『Fire & Water.』」東京都写真美術館（東京、2022年）、「写真新世紀展」東京都写真美術館（東京、2021年）、「第16回写真『1_WALL』グランプリ個展」ガーディアン・ガーデン（東京、2018年）など。第16回写真「1_WALL」グランプリ、第44回キヤノン写真新世紀優秀賞、第8回大理国際写真展最優秀新人写真家賞を受賞。アルル国際写真祭ダミーブックアワード2019及び2022ファイナリスト、シンガポール国際写真祭ダミーブックアワードグランプリなど手製本への評価も高い。

金川晋吾 | Kanagawa Shingo

人と人との関係や距離感を冷静なまなざしで捉え写真やテキストで表現する金川。本展で紹介する、失踪を繰り返す父を撮影した代表作〈father〉、そして金川自身の共同生活を撮影した〈明るくていい部屋〉には、可変的な人間関係でありながら、一般的な概念・役割にとらわれない個と個の距離と関係性が切り取られています。会期中には、関連イベントとして、映像作品〈father〉の新作を1階ホールで上映します。



〈father〉より 2009年 作家蔵 ©Shingo Kanagawa

1981年京都府生まれ。2006年神戸大学発達科学部人間発達科学科卒業、2015年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。社会のなかで規範とされている役割を越えて、自身の視点にもとづき、自己と他者との流動的な関係性を写真や文章によって表現している。主な展覧会に、2022年「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！」（森美術館）など。2016年『father』（青幻舎）、2023年『長い間』（ナナルイ）、『いなくなっていない父』（晶文社）などを刊行。長崎のカトリック文化や平和祈念像、自身の信仰をテーマにした『祈りと長崎（仮）』（書肆九十九）を刊行予定。第40回写真の町東川賞新人作家賞受賞。

原田裕規 | Harada Yuki

視覚文化をモチーフに社会をテクノロジーやパフォーマンスを用いて作品にしている原田。本展に出品する《写真の山》、《One Million Seeings》は、持ち主を失った写真に着目。作者が写真を眺める映像と、それを観客が追体験できる《写真の山》では、かつて誰かが見た光景を通じて、見るものが持つ記憶を喚起させ、物体であった写真・他者の風景を吊っているかのようです。



《One Million Seeings》2019年 作家蔵 ©Yuki Harada

1989年山口県生まれ。2016年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。とるにたらない視覚文化をモチーフに、テクノロジーやパフォーマンスを用いて、社会や個人の本性（ほんせい）を「風景」や「自画像」のかたちで表現している。2019年以降は断続的にハワイに滞在し、ビジン英語に代表されるトランスナショナルな文化的モチーフに着目。近年は日本ハワイ移民資料館、KAAT 神奈川芸術劇場、京都芸術センター、金沢21世紀美術館、原爆の図丸木美術館などで個展を開催。作品収蔵先に広島市現代美術館、日本ハワイ移民資料館など。TERRADA ART AWARD 2023で神谷幸江賞を受賞。単著に『評伝クリスチャン・ラッセン』（中央公論新社）、『とるにたらない美術』（ケンエレブックス）。

出品点数、主な出品作品

129点

大田黒衣美 〈sun bath〉 5点

かんのさゆり 〈New Standard Landscape〉 48点組

千賀健史 〈HIJACK GENI〉、《まず、自分でやってみる。》ほか 36点

金川晋吾 〈father〉 8点組、〈明るくていい部屋〉 28点組

原田裕規 《写真の山》 1点、《One Million Seeings》 3点

公式図録

『現在地のまなざし 日本の新進作家 vol. 21』

B5判、160ページ、2,800円（税込）、東京都写真美術館発行

きりとりめでの（美術批評家）、小林麻衣子（東京都写真美術館学芸員）による論考、作家ステートメント、主な出品作品図版のほか、きりとりめでの氏が監修し、2007年1月から2024年8月まで日本国内の写真に関する展覧会、雑誌、賞、社会的な出来事をまとめた『写真関連年表』を掲載。スマートフォンのカメラ機能が広く普及するきっかけとなった初代iPhoneの発売が正式発表された2007年1月9日を起点に現在に至るまでを、写真を発表することと、作家を取り巻く環境がどのように変化したのか、同時代の社会動向とともに体系的に見わたします。

関連事業 ※事業は諸般の事情により内容を変更する場合があります。

[出品作家とゲストによるトーク]

○12月14日(土)14:00-17:00

かんのさゆり(出品作家)×千賀健史(出品作家)×金川晋吾(出品作家)×きりとりめでの(美術批評家)

○2025年1月18日(土)15:00-17:00

大田黒衣美(出品作家)×原田裕規(出品作家)×中村史子(大阪中之島美術館主任学芸員)

会場：東京都写真美術館1階ホール

定員：190名(整理番号順入場/自由席)

参加費：無料

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布します。

[出品作家による上映]

○11月2日(土)15:00- 金川晋吾《father 2011-2013》、《father 2015.05.18》、《father 2008.12.08》

○2025年1月11日(土)15:00- 金川晋吾 新作上映

会場：東京都写真美術館1階ホール

定員：190名(整理番号順入場/自由席)

参加費：無料

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布します。

[ワークショップ]

12月13日(金)18:00-19:45「写真集を見ながら語る会」

講師：かんのさゆり(出品作家)

定員10名(事前申込制)

参加費：無料

※申込方法は当館ウェブサイトにてご確認ください。

[担当学芸員によるギャラリートーク]

11月1日(金)14:00-

11月22日(金)14:00- 手話通訳付き

12月20日(金)14:00- 手話通訳付き

※当日有効の本展チケット、展覧会無料対象者の方は各種証明書等をお持ちのうえ3階展示室入口にお集まりください。

開催概要

現在地のまなざし 日本の新進作家 vol. 21

The Gaze of the Present: Contemporary Japanese Photography vol. 21

会期 | 2024年10月17日(木) - 2025年1月19日(日)

会場 | 東京都写真美術館 3階展示室

主催 | 公益財団法人東京都歴史文化財団東京都写真美術館、東京新聞

協賛 | 東京都写真美術館支援会員

電話 | 03-3280-0099 WEB | www.topmuseum.jp

開館時間 | 10:00-18:00 (木・金は 20:00 まで。1月2日(木)と3日(金)は 10:00-18:00 開館)

入館は閉館 30 分前まで

休館日 | 毎週月曜日 (月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始 (12/29-1/1)

観覧料 | 一般 700 円、学生 560 円、中高生・65 歳以上 350 円

※ 小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)は無料

※ 1月2日(木)、3日(金)は無料

※ オンラインで日時指定チケットを購入いただけます

[お問い合わせ先]

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

東京都写真美術館 管理課企画広報係 press-info@topmuseum.jp

展覧会担当 小林麻衣子 (東京都写真美術館学芸員)

本展は諸般の事情により、内容を変更することがございます。最新情報は当館ウェブサイトをご確認ください。